

©2022 YHAL, YITP, Kyoto University
京都大学基礎物理学研究所 湯川記念館史料室

Scrap
Book

第二回

科学者京都会議

MAY
7-9
1963

於
竹原、広島県


No. 70

C092-016

Scraper Book

c092-016

関係のない大衆運動が国際政治に
影響を与え、平和の維持に貢献し
ている。この事実は世界史が新し
い段階にはいっただことを示す」と
前置きして3者のように述べた。

はすっかり主体性、自主性を失
ってしまった。われわれ科学者
は平和の問題、アジアとくに中
国との交流問題を考える際、以
上のような点をまず反省する必
ずがある。

フランスなどの場合は自らに
合わないものを強圧した。そこ
で水爆の出発点、人類滅亡と
いう明白な危機の前に立って、
戦争の論議から平和の論議へと

八日の衆議院外務委員会で行なわれ
た米原子力潜水艦寄港問題につ
いてのおもな質疑応答の要約。

得られるまで懸念なことをしな
い」といったのは、国民の安心が
得られるまでと了解してよいか。
大平外相 当然のこと、いま
安全性を確かめるために最大限の

外相 米国の間には安保条約
があり、それが双方が恩恵である
ことが大前提である。米国の核兵
器を持ち込むとは考えていない。
帆足計氏(社・東京四区) 核弾
頭をつけないだけならば核装
備とはいわないのか。
安藤(アメリカ局長 オネスト)

科学者京都会議開く

【竹原宛】バグウォッシュ会議の
日本版「第二回科学者京都会議」
は七日前九時四十分から広島県
竹原市の「佐々木ホテル」で開か
れた。出席者は湯川秀樹、朝永振
一郎博士ら理論物理学者を中心に
十三人。九日までの三日間「キ
ューバ以後の世界情勢」「アジア
の中の日本」「科学者の社会的責任」
の三テーマについて討議する。
七日は午前九時四十分開会、湯
川博士のあいさつについて午前
中は三村広太郎教授を議長に
まずキューバ以後の世界情勢
をとり上げ、田中鎮次郎氏が
「地域的安全保障と封じ込め政
策との関連性について」説明し
た。午後は二時から久野取吉
院大教授が議長となり「アジア
の中の日本」をテーマに佐久間
澄広大教授が「アジアにおける
戦争と平和の問題」野上茂吉郎
東大教授が「一つの思考実験と
してのアジア科学者会議の可能
性」について提案する。

- 【出席者】▽湯川秀樹(京大理論物理学)▽朝永振一郎(東京教育大、理論物理学)▽坂田昌一(名古屋大、理論物理学)▽山口朴郎(東大、史学)▽木川博(立命館大、憲法)▽野上茂吉郎(東大、理論物理学)▽久野取吉(理研大、哲学)▽三村剛郎(広島大、理論物理学)▽佐久間澄(広島大、理論物理学)▽田中鎮次郎(評論家)▽三宅義雄(東京教育大、理論物理学)▽豊田利幸(京大、理論物理学)▽高木隆二(京大、理論物理学)

アジアの話合い強調

科学者 野上教授が提案

【竹原一広島原】竹原市で開か
れている第二回科学者京都会議
の七日は午前中三村広太郎
教授が議長となり「キューバ以
後の情勢」をとり上げ、田中鎮次郎
氏が「地域的安全保障と封じ込め
政策との関連性」について報告し
た。田中氏は戦後のアメリカの政
策を詳細に分析した後「現在東西
両陣営はそれぞれ国連憲章第九
一条(自衛権)第五十二条(集団
安全保障)をよりどころに軍事ブ
ロックを形成している。
しかしこれは国連憲章制定の精
神にもとらざるものであり、またま
去年は国連創立二十周年にあた
るときでもあるので、同憲章の百
九条に基づいて今日の憲章のあり
方を再検討すべきときではない
か」と強調した。
午後は久野取吉院大講師が議長
となり「アジアの中の日本」をテ
ーマに佐久間大教授が「アジア
における戦争と平和の問題」につ
いて報告、現在のアジア各国がそ
れぞれ東西からの援助を受けてい
るが、これらの援助が果たして各

国の平和と繁栄に役立っているか
どうかについて鋭い分析をおこな
った。
ついで野上東大教授は「アジア
科学者会議の可能性——一つの思
考実験」と題して「バグウォッシ
ン会議に見られるように科学者は
どんなにすかしい立場に置かれて
も国境を越えて話合える人種であ
る。したがってアジアの緊張緩和
のためこの種の会合、とくに日本

人類の立場を強調

科学者 平和への責任討議

【竹原】広島県竹原市で開かれていた第二回「科学者京都会議」二日目の八日、午前中は三宅泰雄氏の司会で前日引き続き「アジアの中の日本」のテーマで討論が行なわれ、江口伸郎氏が「世界史の中の日本」を主題に報告、午後は一科学者の社会的責任」をめぐって久野収、坂田昌一両氏の報告を中心にした話し合いが続けられた。江口氏は「現在の世界では、平和が実践的な課題になっている。つまり平和という抽象的なことばによって現実的に大衆を組織できるものである。今日では国家に直接関係のない大衆運動が国際政治に影響を与え、平和の維持に貢献している。この事実が世界史が新しい段階にはいっただことを示すと前置きして話し合った。

原子力を中心とする科学技術の発展にささげられたこの人類が、という考え方の前には民族国家、階級対立は絶対的な意味を持たないようになってきた。この現実には科学者は許さずべきだ。アジア、アフリカなどの民族国家は進歩段階にあるが、現在の世界の平和はこれら諸国の自主的な動きのうえに成り立っているといっても過言ではない。

一方、日本は明治以来の近代化の過程では世界史の現実にとっつきま、押されてきたのに、現在はすっかり主体性、自主性を失ってしまった。われわれ科学者は平和の問題、アジアとくに中国との交流問題を考える際、以上のような点をまず反省する必要がある。

午後三時、坂田昌一氏は「組織の問題」でつぎのように報告した。国家は科学政策を立すれに合つたものからせよとする。フランスなどの場合は自らに合わないのを強圧した。そこで水原の出現以来、人類は正しく明らかな危機の前に立って、戦前の論議から平和の論議へと

変えていくための科学者の国際協力を考えなければならなかった。科学者たちは学術刷新委員会を話し合った結果、日本学術会議が生まれた。また民主主義科学者協会のようなものまでできたし、科学者京都会議もできた。これをどうに伸ばし

てゆくかが今後の課題である。このあと坂田氏は「科学者が生涯の務め」として「いけばよい時代ではなくなっている。政治的団体に利用される危険を避けながら大衆とどう結びつくか」を考えた。三日月の九日は午前中全体討論を行ない、午後から会場を広島市に移し、新広島ホテルで合同記者会見、午後六時半から同市平和公園内の同市公会堂で湯川秀樹、朝倉一、末川博三氏が「平和を創造するための学術講演会」を行なう。

努力をしている最中だ。戸叶氏 国民の安全性に対する不安、戦略基地化への反対は強まる一方ではないか。外相 国民に実情を伝え、理解を求める努力を続けるならば反対の空気が鎮静するものと考えられる。戸叶氏 専門家の学術会議の意見を米側に提出し、反省を求めようか。外相 日本の科学者の要請は「自主的に安全性が保障できない」かぎり寄港は望ましくないといい、このように政府として最大の努力を尽くして米側に照会しその結果を照会して納得してもらいたいと考えている。戸叶氏 事前協議なしに核兵器が運ぶと持てまわされる危険性がある。外相 米側との間には安保条約があり、それに双方が忠実であることが大前提である。米側が核兵器運搬を拒むとは考えられない。船屋計氏(社・東京四区) 核弾頭を運ぶだけではないならば核装備とはいわれないか。安藤アメリカ局長 オネストン

のよう核弾頭をつけることもつけないこともできるものは、核弾頭をつけているときは核兵器であり、つけていないときは核兵器でない、と解釈している。午後五時五十分散会。

安全性確認に努力

原子力潜艦の寄港 外相答弁

八日の衆院外務委員会で行なわれた米原子力潜水艦寄港問題についてのおもな質疑応答の要約。

戸叶里子(社・栃木一区) 外相が「安全性について一応の安心が得られるまで軽率なことをしない」といったのは、国民の安心が得られるまでと了解してよいか。大平外相 当然のこと、いま安全性を確かめるために最大限の

努力をしている最中だ。戸叶氏 国民の安全性に対する不安、戦略基地化への反対は強まる一方ではないか。外相 国民に実情を伝え、理解を求める努力を続けるならば反対の空気が鎮静するものと考えられる。戸叶氏 専門家の学術会議の意見を米側に提出し、反省を求めようか。外相 日本の科学者の要請は「自主的に安全性が保障できない」かぎり寄港は望ましくないといい、このように政府として最大の努力を尽くして米側に照会しその結果を照会して納得してもらいたいと考えている。戸叶氏 事前協議なしに核兵器が運ぶと持てまわされる危険性がある。外相 米側との間には安保条約があり、それに双方が忠実であることが大前提である。米側が核兵器運搬を拒むとは考えられない。船屋計氏(社・東京四区) 核弾頭を運ぶだけではないならば核装備とはいわれないか。安藤アメリカ局長 オネストン



席者(左から野上、佐久間、田中、三村、豊田、朝永、湯川、坂田、末川、三宅、久野、江口の各氏、豊田氏は事務局長、新島島本、口ビエ)

ひつた広島市に移し、午後四時か
ら新島島本ホテルで別項のような声
明書を発表、夕方広島市公会堂で
「平和を創造するための学術講演
会」を開き三百人の会衆の参加を
した。

(立命館大教授) 三宅泰雄(東京
教育大教授) 久野取(学習院大講
師) 三村剛(広島大名誉教授)
佐久間澄(同教授) 田中慎次郎
(評論家、朝日新聞社友)

①大規模の兵器
②軍用航空機
③このとき日本国憲法第九條は
平和時代を創造する指針としてま
ずまず大きな現時的意義を持つに
至っている。

④国連憲章に東西両陣営の敵対
する軍事プロットの形成を助長す
る恐れのある条項のあることを指
摘し、その再議を提案し、中華人
民共和国の国連加盟の実現するこ
とが国連本来の在り方である。

⑤アジアにおける緊張の根柢は
米合衆国と中華人民共和国との間
にあり、この緊張を緩和し、科学
者たちの努力を含む平和運動が国
際政治に影響を及ぼしている。

⑥平和の創造に対しては人文、
社会、自然の各分野の科学者が協
力してその社会的責任を果たして
がなくてはならない。

⑦「二面」問題
⑧「二面」問題

平和運動へ協力強調

科学者京都 会議二日目 実質討議を終る

【竹原・広島県】「核戦争によ
る人類の絶滅をさげるために自
然、社会科学者はなにをなすべき
か」を議題とする第二回科学者京都
会議は、八日午前九時半から竹原
市の佐々木ホテルで、二日目の
の会議を開いた。この日は三宅東
京教育大教授と三川立命館大校長
が議長になつて前日に続いて「ア
ジアの中の日本」「科学者の社会
的責任」について江口村郎東大教
授(西津京) 久野取学習院大講師
(新島) 坂田昌一 名大教授(理論物
理学)の三氏が報告、討議がおこ
なわれた。

この日の報告、討議で目立った
のは科学者と平和運動の結びつき
だった。各氏の報告、発言はこ
次の通り。

まず江口教授は「世界史の中の
日本」のテーマで世界史からみて
またたく新しい段階、つまり科学
技術の発達によってこれまでの階
級、国家、民族、イデオロギーを
越えた、人類、という課題に直面
してゐる。日本の社会科学者もこ
のような歴史的条件下に奮起する必
要があらわされた。

これに関連して朝永教授も「学
問のあり方と科学者の社会的責
任」についてこゝに発言を求め、
自然科学者は研究がイデオロギ
ーと直接結びつかないため、平和運
動に協力しやすい。しかし社会科学
者はそれはいかない。だが、多
角的な真実を探求すること、科学
者の共通の立場から、一体となつ
て平和運動のために協力し合へ
べきではないかと強調した。

最後に坂田昌一名大教授は科学
者を平和のために、いかに組織す
るかについて発言、「現在の大きな
りな研究は科学政策を持った

国家や大企業に依存しなければな
らないのが現状である。しかし水
爆は完成したときをきつかけに
平和の論理が力を得て、科学者
の国際的協力の機運が生れた。科
学が人類のためにあるとするなら
ば、これからは低開閉の閉鎖に
向けられるべきである。原子科学
は最新の学問であるから原子科学
者の間には新しい考え方があ
る。この新しい考え方を大衆と結び
つけ、いかに伸ばしていくかが問題
である」と述べた。

なお実質的討議はこの日で終り
最終日の九日は午前中に全体討議

大衆と結びつきを

科学者京都会議で強調

第三回科学者京都会議第二日の
八日は午前九時半から広島県竹原
市佐々木ホテルで続開、午前中は
江口東大教授が「世界史の中の
日本」と題して報告、このあと朝
永学術会議会長が予定をはずして
「学問のあり方と科学者の社会的
責任」について二つの考え方を述
べた。

午後には久野取学習院大講師が「職
業倫理と市民倫理」坂田名大教授
が「組織の問題」についてそれぞ
れ報告、午後五時半予定された報
告を全部終えた。

この日の報告では朝永、久野、
坂田の三氏報告がともに核兵器の
問題提起を提起した。

出現をはじめとし、科学が社会を
動かすようになった現在では、社
会科学者を含めたすべての科学者
が人類の平和にたいして責任があ
ることを強調した。なかでも坂田
教授は科学者と組織と大衆をいかに
結ぶかが今後の課題であること、
科学者京都会議のこれからの運動
について二つの問題を提起した。



非核武装を貫け

声明を
発表

科学者京都会議終る

【広島】湯川秀樹博士ら日本の代表的科学者や知識人が集り、去る七日から広島県竹原市で開かれた「第二回科学者京都会議」は、「キーパー」以後の世に署名したのは次の十一氏。

湯川秀樹（京大教授） 朝永振一郎（東京教育大教授） 坂田昌一（名古屋大教授） 江口朴郎（東大教授） 野上茂吉郎（同） 末川博（立命館大教授） 三宅泰雄（東京教育大教授） 久野取（学習院大講義員） 三村剛（広島大名誉教授） 佐久間登（同教授） 田中慎次郎（評論家、朝日新聞社友）

【広島】湯川秀樹博士ら日本の代表的科学者や知識人が集り、去る七日から広島県竹原市で開かれた「第二回科学者京都会議」は、「キーパー」以後の世に署名したのは次の十一氏。

止政策は核ミサイル基地である原千力潜水艦を主体とする核戦略をとりながら地球をおおむね基地網とす。ますます危険な様相を示して来た。世界各国のすべての民衆が多数の政策決定者によって人置にされている。

がいまなお敵対状態にあることであり、世界平和のため著しい障害となつてゐる。日本が非核武装の原則を貫き、一切の核兵器の持込みを拒否することは、アジアにおける核戦略体制の恒久化を防ぎ、世界平和に対する日本の大きな貢献となる。

【二面に解説】



声明を発表する（右から）江口、久野、三宅、末川、坂田、湯川、朝永、豊田、三村、田中、佐久間、野上の各氏（広島ホテルで）

非核武装貫こう 科学者京都会議終わる

声明発表

湯川秀樹、末川博氏ら日本の代
表的な自然、人文、社会科学者十
一氏が参加。七日から広島県竹原
市で開かれた「第一回科学者
（立憲大学教授）が声明を発表し、
京都会議は九日後、会場を広

ることを求めれば責任を感じないわけには
いかない」と付け加えた。なお声明書は近
く会議参加者全員の名前を付け、各国の国
連代表をはじめ内外の科学者、知識人に送
られる。

声明（要旨）

人類が初めて原子爆弾の惨禍をうむった
広島に近い竹原に集まった科学者
一年前の第一回科学者京都会議の意義と内容を再確認し
「キューバ以後の世界の情勢」「アジアの中の日本」「科学者の
社会的責任」に関する諸報告を中心として、七日から三日間に

科

平和に対する日本の大きな貢献となる。
六、平和の創造に対しては人文・社会・
自然分野の科学者が協力して、その社
会的責任を果たすことが差し迫って必要
である。さらに中華人民共和国の科学者の協力をえる可能性
を模索することが将来の重要課題の一つである。
七、科学の適用を防ぐ力と倫理が社会に広がりつつあることに
励まされ、この努力をあらゆる人々とともに進めたい。
（声明の詳細な内容は二面に）

声明は「平和時代を創造するた
めに非核武装の原則」と題す
る方針を貫くことは、世界の平和
に大きな意義があると強調、アジ
ア地域の平和のために、中国の科
学者の社会的責任にかんする諸
報告を中心として、五月七日から
三日間にわたる討議を行ない、次
に掲げる諸点について意見の一致
をみた。

平和への協力訴え 身近な問題とりあげる

解説

第二回科学者京都会
議は、昨年の第一
回会議で確認された原則のうえ
に立て「日本人、そして日本の
科学者として平和のためになにを
すべきか」と身近な問題が討議さ
れたのが特徴だ。この点が
日本の非核武装の問題が会議を
貫くテーマとして取り上げられた
のは当然といえる。この点で
問題となる原子力潜水艦の寄港問
題については、直接的討議はな
れず「この問題はもと大島の見
地から考えた」ともいっている。
しかし、この問題をめぐる政府
の方針と社会的責任からの科学者
の発言が真向から対立している
おりから、この会議が日本への核
兵器持ち込みをきり拒否する
態度を出したことは意義がある。
次に中国問題が前面に出たのも
特徴の一つだ。米中と中国の戦後

の長い戦時状態と、中国封じ込
めによる国際社会からの孤立化
は、アジア、ひいては世界の平和
に大きな影響を与えている。中国
の核武装が近々と伝えられるた
けに、この点からも日本に核兵器が
持ち込まれるのでは、この緊張を
一層強めることになる。この緊張
状態を緩和し中国の国際社会への
発言権を認めるために国連加盟
の実現が必要であるといっわけ
だ。

「科学者の社会的責任」も議論
を呼んだテーマだ。核兵器出現
の50年、原子科学者が持つべき
べき、パワーストーン会議、科
学者京都会議も原子科学者がまず提
唱者となった。しかし世界の平和
にたいしては自然科学者ばかりで
なく人文、社会科学にも責任があ

声明の内容

- 人類が初めて原子爆弾の惨禍を
被った広島に近い竹原に集まった
私たちが科学者は、一年前の第一回
科学者京都会議の意義と内容を
再確認し「キューバ以後の世界
情勢」「アジアの中の日本」「科
学者の社会的責任」にかんする諸
報告を中心として、五月七日から
三日間にわたる討議を行ない、次
に掲げる諸点について意見の一致
をみた。
- 一、大島宣言以来の戦争阻
止政策は、移動可能な核ミサイル
基地である原子力潜水艦を主体と
する核戦略をとりつつあり、地球
をおおむね基地網と相まってますま
す危険な様相を呈してきた。世界
各国のすべての民衆が少数の政策
決定者によって人質にされてい
る。
 - 二、歴史は連綿とてはな、人間
によつてついでついでと、科学
者たちの努力を言ひ広範な大衆の
平和運動が国際政治に影響を与え
てきた。
 - 三、日本国憲法第九条は平和時
代を創造する指針としてますます
大きな現実的意義を持つていた
ている。
 - 四、国連憲章に東西両陣営の敵
対する軍事ブロックの形成を助長
するおそれのある条項のあること
を指摘し、その再審議を提案し、
中華人民共和国の国連加盟の実現
することが、国連本来のあり方で
ある。
 - 五、アジアにおける緊張の根源
は米中対立と中華人民共和国との
間がいまなお対峙状態にあること
であり、世界平和のため適切な障
害となつてゐる。日本が非核武裝

の原則を貫き、いっさいの核兵器
の持ち込みを拒否する。アジア
における核戦体制の恒久化
を防ぎ、世界平和にたいする日本
の大きな貢献となる。

- 六、平和の創造にたいしては人
文、社会、自然、全分野の科学者
が協力して、その社会的責任を果
たすことがさしあたり必要であ
る。さらに中華人民共和国をはじ
めアジア諸国の科学者の協力をう
める可能性を検討することが将来の
重要課題の一つである。
- 七、科学の適用を防ぐ力と倫理
が社会に広がりつつあることに励
まされ、この努力をあらゆる人々
とともに進めたい。

核兵器
議を開くのであつと指摘。この
ため三日間の会議でも、政府も
の期待を持たせたのが注目され
れた。際情勢にたいして自然科学者が社会
た。（広島）

【広島】広島県竹原市の佐々木旅館で、七日から三日間にわたる開かれた第二回科学者京都会議は、最終日の九日全体討議を終わった。午後八時、会場を竹原市の平和公園内にある新広島ホテルに移し、同四時からの記者会見で今度の会議の成果を説明書の形で発表した。発表には会議参加者の全員十一人が出席、事務局長役の豊田利幸立教大教授から「平和時代を創造するために、非核武装の原則」と題する説明書を読み上げた。この説明書はまず前文で、人類が最初の原爆の惨禍を受けた広島市に近い竹原市で会議を持ったことの意味、昨年の第一回会議の再確認、日本の置かれている現在の困難な立場、科学者の社会に対する責任などを中心に討議したことを述べ、別項の諸点を強調している。

この説明書は、湯川博士は「核非武装の原則を貫くことが止むを得ない」と述べた。それから今後の問題に対する姿勢が決まる。軍備と経済、などの困難な問題についても、前回会議で取り上げたことがきつかけとなり、すでに多くの経済学者が熱心に研究して来たところになった。これも京都会議の重要な成果の一つだ」と語った。最後に朝水誠一郎博士は科学者の社会的責任に就いて「科学者のこういう発言について、一種の選民意識から出ているとの批判もあるが、科学が人類の破壊に悪用されることを考えれば責任を感じないわけにはいかない」と付け加えた。なお説明書は近く会議参加者全員の名前を付け、各国の代表表をはじめ内外の科学者、知識人に送られる。

声明(要旨)

人類が初めて原子爆弾の惨禍をこうむった広島に近い竹原に集まった。私たち科学者は一年前の第一回科学者京都会議の意義と内容を再確認し、「キューバ以後の世界情勢」「アジアの中の日本」「科学者の社会的責任」に関する諸報告を中心として、七日から三日間に

科学の悪用防く

科学者京都会議終わり声明

わたり討議を行ない、つきに掲げる諸点について意見の一致をみた。

一、大量殺りく兵器による戦争禁止政策は、移動可能核ミサイル基礎である原子力潜水艦を主体とする核戦略をとりつづけるべきである。世界各國の總ての風潮が少数の政策決定者によって人質にされている。

二、歴史は連綿とではなく人間によってつくられるもので、科学者たちの努力を旨む広範な大衆の平和運動が国際政治に影響を与えている。

三、日本国憲法第九条は、平和時代を創造する指針としてますます大きな現時的意義を持つていた。

四、国連憲章に東西両陣営の敵対する軍事プロットの形成を助長するおそれのある条項があるので、その再審議を提案する。中華人民共和国の国連加盟を實現することが国連本来のあり方である。

五、アジアにおける緊張の根源は、米合衆国と中華人民共和国との間がいまなお敵対状態にあることであり、世界平和のためには、いかに早くもこの問題を解決する必要がある。日本が非核武装の原則を貫き、一切の核兵器の持ち込みを拒否することは、アジアにおける核戦略体制の恒久化を防ぎ、世界平和に対する日本の大きな貢献となる。

六、平和の創造に対しては人文・社会・自然全分野の科学者が協力し、その社会的責任を果たすことが差し迫って必要である。さらに中華人民共和国の科学者の協力を求める可能性を探討することが将来の重要課題の一つである。

七、科学の悪用を防ぐ力と倫理が社会に広がりつつあることを励まされ、この努力をあらゆる人々とともに進めたい。

(声明の詳細な内容は二面に)

解説

九日閉幕した第二回科学者京都会議は「非核武装の原則」と題した声明書を出したが三日間の報告、討論は昨年京都で開催された第一回会議以上に密度が高くなり、「アジアの中の日本」「科学者の社会的責任」と日本にとりて身近なものだった。このため声明書も第一回会議のそれを、原則の提示に終ったのとは比べ、はつきりとした、姿勢、を持ったものとなった。

科学者に方向づけ

京都会議の声明

あるが、われわれは科学者の研究の結果が社会に大きな影響を持つ時代になったからこのような会議を開くのである」と指摘。この声明は三回会議でも、政治や国際情勢にうとい自然科学者が社会

科学者の義務を聞く、勉強会といった感じが強く、両分野の科学者の「接触」を深め、広げ、平和を創造するために前進しようという一部科学者だけの特権意識によって進められていたとの声

「この会議を続けるには、われわれは、この分野の科学者が、パナウツシエ精神を、理解、共鳴して、これによって、将来の期待を持たせたのが注目された。」(広島)

科学者の協力が必須である(要旨)を要約している。

出席、声明署名者は次のとおり

湯川秀樹(京大基礎物理学研究所) 朝水誠一郎(日本学術会議)

止政策は、移動可能な核ミサイル基地である原子力潜水艦を主体と

